

〈原 著〉

内的作業モデルが仕事への取り組み方に及ぼす影響

— 青年期から成人期の17年間の縦断的研究 —

山岸 明子*

The influence of internal working models on attitude to one's job through a 17-year longitudinal study from adolescence to adulthood

Akiko YAMAGISHI*

Abstract

The purpose of this study was to investigate the influence of the internal working models (IWM) in adolescence and in adulthood on attitude to one's job, using 17 year-longitudinal data. Participants were 19 females who responded the questionnaire as to IWM when they were nursing students, and who responded the same questionnaire in their late thirties and were interviewed about their job. Based on scores of IWM in two times, participants were classified into five groups. As to attitude to their job they were classified into two groups: positive or negative.

The main results were as follows. (1) In the positive group the scores of IWM were higher in both times, and there were some who got a rewarding job. (2) All participants whose scores of IWM in both times were low belonged to the negative group. It showed that not only IWM in present time but also IWM in adolescent effect on attitude to one's job in adulthood, and furthermore situational factors like as whether one can get a rewarding job or proficient skills also effect on it.

Key words: longitudinal study, internal working models, attitude to one's job, adolescence, adulthood

1. はじめに

精神的に健康な大人について尋ねられた Freud が端的に“Lieben und Arbeiten”と答えたという話は有名だが、成人期の精神的健康を考える時、充実した職業生活を送ることは重要な要因と考えられる。我々が充実した職業生活を送ることに関与する要因は何だろうか。職務満足に関する要因は基礎的理論を提示した Herzberg (1959) によれば、達成や承認など仕事に付随する満足に関する要因(動機づけ要因)と、作業条件や職場での対人関係、賃金

など不満足に関する要因(衛生要因)からなるとされ(高橋, 1999)¹⁴⁾, その後多くの研究がなされ, 個人の要因として自尊心や自己効力感(高橋, 1999)¹⁴⁾, 社会的スキル(三輪他 2010)¹⁰⁾, 心理的ストレス(島津 2004)¹²⁾, 性格傾向(高橋, 1999, 諸上 2012)¹⁴⁾¹¹⁾等が指摘され, 看護師の職務満足に関する研究も多い(平田ら (2012)⁹⁾, 荒木ら (2014)¹⁾がレビューを行っている)。

発達心理学の観点にたてば, 仕事における満足が得られるかどうかは成人期の発達課題(Erikson, 1964³⁾, Havighurst, 1972⁶⁾)であり, それまでの発達課題の達成のあり方や自我の成熟度が関与すると考えられる。また職業観や自分および他者との関係

* (元)順天堂大学
(before Juntendo University)

のとらえ方,あるいは家族他の支援等様々な要因が関与していると考えられる. Gilligan (1982)⁴⁾が指摘したように,対人的志向性が高い女性の場合は,充実した職業生活を送る上で,まわりの人と良い関係を作ることが特に重要だし,子育てを中心的に担う女性が職業生活を続けるためにはまわりの人から支援を得ることも必要とされる.本研究では職業生活への満足度や仕事への態度と関連するものとして,対人的な情報を処理し対人的な行動をする際に使用される対人的枠組み(内的作業モデル)を取り上げ,仕事への取り組み方との関連について検討する.

内的作業モデル (Internal Working Models:以後 IWM と略記)は, Bowlby (1973/1976)²⁾によって提唱された概念で,乳児期に養育者との相互作用から形成された愛着関係が内在化されたもので,愛着は幼少期に限らず生涯にわたるものとして理論化され, IWM を使って成人愛着の研究が盛んになされるようになった. IWM とは愛着対象との相互作用に基づいて構成される対人的関係に関する主観的な信念や期待である.我々は「自分は他者から受入れられるのか,他者は頼ることができるのか」ということに対する枠組み(自他の有効性に関する対人的な枠組み)を作り,それに基づいて対人的情報を処理し,未来を予測し,対人的行動の計画をたてるとされる.従って安定した IWM をもつ者は他者・世界との関係が肯定的で適応的になりやすいし,不安定な IWM をもつ者は不安定な対人行動をしやすいというように,どのような IWM をもつかによって対人的行動や適応が規定されることになる.職業生活への満足度や仕事への態度にも IWM が影響することが考えられるし,現在の IWM と共に過去に持っていた IWM との関連も予想される.

IWM がどの位変動するのか (IWM の連続性) に関しては多くの研究がなされているが(たとえば Grossmann, et al. (2005)⁵⁾等,幼少期から青年期の縦断的研究が蓄積されている),過去の IWM が後の時期の行動や生き方にどう影響するかの問題を, retrospective にではなく prospective に検討する研究

は少なく,青年期以降についてはまだほとんど行われていない.(山岸 (2014)²⁰⁾が青年期の対人的要因の成人期の適応への影響について検討している.また IWM を指標としてはいないが,長期的な影響を検討したものとして, Werner & Smith (2001)²¹⁾や Vaillant (2002)¹⁶⁾の研究がある.)

IWM と仕事への満足度との関連については, Hazan & Shaver (1990)⁸⁾が670名の成人(内522名は女性)に質問紙法で検討した研究があり,現在安定した IWM の Secure 型である者は仕事への満足度が高く,不安定な Ambivalent 型のは満足度が低いこと,不安定な Avoidant 型は同僚との関係以外は満足していること,愛と仕事のバランスに関しては, Avoidant 型は仕事を重視することが示されている. Werner & Smith (2001)²¹⁾も長期の縦断的研究で,40才時の仕事への満足度を予測する要因として,18才時に家族に対してもたれる安心感がプラス,両親の問題がマイナスに関与すると報告している(ただし IWM の指標は使われていない).山岸 (2013)¹⁹⁾は看護学生を対象に,青年期から成人期にかけて19年間の縦断的データに基づいて,40代の女性9名を対象に検討を行っている.青年期に記述された生育史に基づいて,生育過程の良好さから良好群—小問題群—問題群に分けたところ,良好群の3名は仕事に対して充実感をもっていること,小問題群は反対に仕事よりも家庭が重要とする者が多いことが示された.問題群は進路の決定要因が自立の手段であったという特徴が見られた.山岸 (2012)¹⁸⁾の研究も上記と同じデータを用いて,青年期から成人期にかけての IWM のあり方から4つのタイプに分けて適応感との関連を検討し, IWM が以前よりも安定した群は夫に満足し仕事よりも家庭を重視することが多い一方,不安定になった群は夫との関係に問題を感じ,仕事に対する熱意が語られることが多いことを報告している.なお卒後17-19年に調査を行ったのは,40才前後は,職場においては看護職としての仕事にかなり熟達して責任も重くなり,また家庭においても母親として多くの経験を積み,様々な思いをもつ時期と考えられるからである.

以上のように、IWMと仕事への態度との関連に関する研究はいくつか行われているが、現在のIWMとの関係だけであったり、両親との関係等IWMと近いがIWMの指標ではなかったり、被調査者の数が少なく、仕事への思いの分析も主に家庭とのバランスの観点からで分析も簡単なものであるという問題があった。本研究では看護学生の時に調査を行った者を対象に17年後の縦断的検討を行なう。その際1)現在のIWMだけでなく青年期のIWMも視野に入れて、成人期の仕事への態度—取り組み方との関連を検討する。2)仕事への取り組み方について、面接調査によってより詳しい分析を行う。3)山岸(2012, 2013)¹⁸⁾¹⁹⁾でも一定の結果を得たが、対象者が少ない等十分なものではないので、青年期から縦断的にデータを取っている別のコホート(データ数が山岸(2013)¹⁹⁾の約2倍ある)で検討してみる。

以上が本研究の特徴である。

2. 目 的

看護短大生の時に質問紙調査をした卒業生に、17年後同様の質問紙調査と面接を行い、青年期と成人期の内的作業モデル(IWM)が成人期の仕事への取り組み方とどう関連しているのか、2時期のIWMが成人期の仕事への取り組み方とどう影響しているのかについて、縦断的なデータによって検討する。

3. 方 法

1) 被調査者

看護系の短大3年時(1994年)に生育史の記述と質問紙調査に回答した者(99名)の内、連絡がとれた者に調査の依頼をした(なおこのコホートは、1994年以外に1996年、2001年、2005年にも調査を実施している)。質問紙調査に40名が回答し、その内面接調査にも応じた19名を対象とした。年齢は37~39才。看護師9名、保健師4名、看護教員1名、養護教諭1名、パート職(看護職)3名、専業主婦1名(結婚までは看護師)。既婚者12名(内1名は離

婚)、未婚者7名(内2名は婚約中)、子供がいる者11名である。

2) 調査時期

質問紙調査—1回目 1994年5月 今回—2011年7月から8月。

面接調査—2011年8月から9月。

3) 手続き

- 質問紙調査—同窓会名簿に現住所を開示している者に質問紙調査の依頼をし、同意した者に質問紙を郵送して郵送法で回収した。
- 面接調査—質問紙調査時に面接の依頼もし、協力の意思を示した者と連絡をとり、日程と場所の調整をして母校の演習室(1名は著者の現在の研究室)で面接を行った。実施前に研究協力についての同意書に記入してもらった。所要時間は40分~1時間程度。同意を得てICレコーダーに録音し、書き起こした。

4) 調査内容

【質問項目】縦断研究は1994年と同じ質問項目と、新たにいくつかつけ加えて行われてきたが、本研究では現在の対人的枠組み(IWM)のみを使用する。詫摩・戸田(1988)¹⁵⁾がHazan & Shaver(1987)⁷⁾を参考に作成したIWM尺度18項目(安定、アンビバレント、回避に該当する項目6ずつ)について5件法(とてもあてはまる5~全くあてはまらない1)で尋ねる。

【面接】卒業後どのように過ごしてきたか、その経過及び印象的だったこと、つらかったこと・大変だったことは何か。自分にとって仕事とは何だったか、仕事をもつ意味。子育てがもつ意味。他者のもつ意味はなにか。自分は変わったか、何によってどう変わったか。自分にとって重要だったこと、大切にしてきたことは何か。今気にかかっていること、充実感を感じていることは何か等について、半構造化面接を行った。

5) 倫理的配慮

順天堂大学スポーツ健康科学部研究等倫理委員会の承認を得た。また匿名で且つ個人が特定されないように配慮して論文化した(面接した者全員の情報

を開示するため、職種や既婚・未婚等の情報は載せず、語りの概要についても特定化される可能性がある情報は曖昧化するようにした。

4. 結 果

(1) 2時期のIWM得点の変化によるグループ分け

Secure, Ambivalent Avoidant の6項目をそれぞれ合計し、今までの研究^{18)~20)}と同様2時期のIWM得点—Secure—(Ambivalent + Avoidant)/2を算出した。そして1994年と2011年の両時期の得点のあり方や得点差から、次の群を設定した。(なお高得点群、低得点群の基準は、2時期の全体の平均値が各3.68, 4.32であることから 4 ± 4 から設定した。)

高得点群—2時期共8点以上

上昇群—2011年の得点—1994年の得点 ≥ 5 点

下降群—2011年の得点—1994年の得点 ≤ -5 点

低得点群—2時期共マイナス値。

その他群—上の4群以外。高得点、低得点群ではなく、上昇・下降群のような大きな変化もない

なお、高得点群で且つ上昇群・下降群でもある者がみられたが(⑧と①)、15点から20点、19点から14点への変化であり、2時期とも高得点で変化も5点と小さいため、高得点群とした。5群の該当者は、各々9名、3名、2名、4名、1名であった。

(2) 仕事への取り組み方の分類

面接の語りの中から、過去から現在の仕事への取り組み方、仕事に対する思い(やりがい感や自分にとっての意味・重要性)を中心に、仕事に対する自信や自己効力感、職場の人間関係、これからの展望、家庭と仕事の両立やワークライフバランス、家族の協力等、仕事に関する語りを抜き出した(限られた質問以外は本人にまかせたので、本人が語りたことが語られ、上記全てが語られているわけではない)。

19名分の語りから、似ているものをまとめる形で分類を行った。まず肯定的取り組み群と否定的取り組み群に分け、更に肯定的取り組み群はA. 仕事にやりがいや自己効力感をもち、充実・満足している

という語り/B. 充実感がないわけではないが、現状を色々変えたり模索してきたことの語り(現在模索中の人も含む)の2タイプ、否定的取り組み群はC. 仕事が自分に合わないという語り/D. 続けてはいるが、充実感を感じられず、ずっと続けていく気持ちではない/E. 仕事にやりがいがない(Dは自分に問題がある、Eは仕事に問題があるというニュアンス)/F. しっかりできるという自信をもてない

表1 仕事への取り組み方の分類の例

肯定的取り組み群
A. 仕事にやりがいや自己効力感をもち、充実・満足している 仕事楽しい。こんなにはまるとは思わなかった/大変だけどやりがいはある。仕事していると充実感を感じる
B. 充実感がないわけではないが、現状を色々変えたりしてきた(現在も模索中の人も含む) 迷ったりしながらスキルをあげるために外国に行ったり、女性としての生き方を考えたり一生懸命やってきた。このまま仕事だけでいいのか、女性としての生き方も充実させるのか迷っている
否定的取り組み群
C. 仕事が自分に合わない 仕事はきちんとやっているが達成感もやりがいもない。人の上にたつのが苦手だが、そのような立場にあり苦痛。一人でやる職人みたいな仕事にむいていくのかもしれない
D. 続けてはいるが、充実感はなく、ずっと続けていく気持ちではない 仕事は楽な気持ちでできるし、辛いことはないが、定年までやるかと言われれば微妙で、50才すぎてやっているイメージはない
E. 仕事にやりがいがない 看護職で頑張っている友人を見ると、虚しい気分になる。私も看護師であれば誰かの役にたっていたのに、何でこんなことをしているのだろうと思う
F. しっかりできるという自信をもてない 仕事をはじめて1年で、今の医療についていけず、スムーズにいかない。ついていけるのか不安を感じている

の4つのタイプに分類された。それらの例を表1に示した。

心理学研究者に以上の基準と例を提示した上で分類を依頼し、2名の一致率を見たところ、一致率は19名中18名(94.7%)で、⑩のみ「肯定的取り組み群」Bとする者と「否定的取り組み群」Eとする者に分かれた。⑩は看護職本来の仕事は充実していたが、現在はそれとは異なった仕事が増え、その仕事には問題を感じているとする語りで、2種の語りのどちらに重みを置くかによって異なった分類になったと考えられる。仕事が充実していたとする語りは主として以前の調査で語られていたもので、本調査だけでは必ずしも明確ではないため、本研究では否定的取り組み群のE「仕事にやりがいがない」に分類することとした。その結果、19名の語りは肯定的取り組み群の者10名と、否定的取り組み群の者9名に分類された。

(3)肯定的取り組み群と否定的取り組み群の2時期のIWM得点及び変化のパターン

表2は仕事への取り組み方の2群(肯定的取り組み群と否定的取り組み群)別の、青年期と現在のIWM得点の平均値と、一元配置の分散分析の結果である。肯定的取り組み群の方が青年期・現在ともIWM得点が高い(5%水準で有意)ことが示されている。2群別のIWM得点の変化のパターンの様相は表3である。IWM得点が高得点の群9名の内7名が肯定的取り組み群であるのに対し、低得点群は4名全員が否定的取り組み群であり、青年期・成人期共IWM得点が高い者は仕事への取り組み方が肯定的なこと、低い者は否定的なことが示された。

(4) 肯定的取り組み群の特徴

肯定的取り組み群に分類された各事例の、2時期のIWM得点、変化のパターンと面接での仕事に関する語りの概要を表4に示した。

肯定的取り組み群は(3)でも述べた様に、青年期のIWM得点が高く成人期も高い者—高得点群が多い(10名中7名)。高得点群の7名はいずれも「仕事に

表2 仕事への取り組み方の2群別の2時期のIWM得点

	肯定的 取り組み群	否定的 取り組み群	分散分析 (F値)
1994年	9.50(7.04)	-2.78(15.73)	5.00*
2011年	10.60(5.93)	-2.67(13.87)	7.64*
N	10	9	

* p<.05

表3 仕事への取り組み方の2群とIWM得点の変化のパターン

変化の パターン	肯定的 取り組み群	否定的 取り組み群	計
高得点群	7	2	9
上昇群	2	1	3
下降群	1	1	2
低得点群	0	4	4
その他群	0	1	1
計	10	9	19

やりがいを感じて楽しい」としたり、あるいは「大変だったり迷ったりすることもあったが、これからも一生懸命やっていきたい」としており、仕事への取り組みが肯定的であった。

それ以外の3名は、上昇群(⑤⑥)と下降群(②)であった。⑤は仕事の充実感と共に「尊敬できる主任さんのもとで働いて、看護師として大きくなった。その主任さんのようにになりたい」と言っている。⑥は訪問看護のベテランになっていて、「病院とは違った、治療優先ではなく生活の中の看護」の魅力や「生活のベースについて一緒に考え整えていく」ことのやりがい、後進を育てることの苦勞と魅力について語っていた。②も看護について深く考え、多くのことを学んだと述べている。「結婚も育児もある意味患者さんを見ていく上で大きな勉強になる」と仕事中心の生き方をしている一方、「仕事と育児が対立した場合は子どもをとる。患者さんを見ていて、身近な人との関係を大切にすることが自分を大切にすることになることを学んだ」と、仕事を通し

表4 肯定的取り組み群の取り組みのタイプ、2時期のIWM得点、変化のパターン及び面接での仕事に関する語りの概要

Case 番号	取組みの タイプ	1994	2011	変化の パターン	仕事に関する語りの概要
①	タイプA	19	14	高得点群	仕事はやりたいことで楽しいし、すごく自分のためになり、やらないとつまらないだろうと思う。子どもの成長の変化を見るのも楽しいし、仕事もあって家庭もあって自分があると思う。
②	タイプA	13	1	下降群	仕事楽しい。こんなにはまるとは思わなかった。(いつ頃から?)臨床でて、看護ってこんなに自分で考えて、自由に接することができるのかと思った。仕事の充実感が大きく、友人や楽しみをないがしろにしてきたかもしれない。彼も仕事のための安眠枕という感じである。
③	タイプA	12	8	高得点群	大変だけどやりがいはある。仕事をしていると充実感を感じる。産休中は楽しくそれなりに幸せだったが、速く復帰したいとも思っていた。
④	タイプA	9	12	高得点群	病院は夜勤があるので、公務員として勤めている。これまでと違う仕事内容もあって大変だが楽しい。家庭があって仕事がある、家族のために頑張っているという気持ちだが、生きがいとまではいかないけれど、充実して仕事をしたいので、勉強している。
⑤	タイプA	-1	4	上昇群	家の事も忘れて没頭できる、そういう時間が必要だと思う。自分が勉強したことを患者さんに還元できたり、試行錯誤してわかってもらえた時とか、すごく嬉しいし、やりがいがある。尊敬できる主任さんのもとで働いて、看護師として大きくなった。こんな風になりたいと思う。
⑥	タイプA	-4	5	上昇群	訪問看護の仕事は病棟とは違った魅力があり、仕事に充実感を感じている。運営にもかかわっていて、大変だがやりがいがある。
⑦	タイプB	14	20	高得点群	迷ったりしながらスキルをあげるために外国に行ったり、女性としての生き方を考えたり一生懸命やってきた。仕事は頑張っている内に楽しくなってきた。責任も重くなってきた。仕事は重要だが、このまま仕事だけでいいのか、女性としての生き方も充実させるか迷っている。
⑧	タイプB	14	15	高得点群	色々職場を変えたりしながらその時々で考えてやっている。自分は自分でいいんだ、無理をしなくてもいいと思うようになり、肩の力が抜けた。私生活を楽しみながら、仕事も充実させていけたらいいと思う。
⑨	タイプB	11	15	高得点群	はじめは大変でつらかったが、試行錯誤しながらがんばってきた。何か違うと思って部署を変えたり、海外に行ったりした。余裕がでてきて、人のことを考えられるようになった。人が好きだからずっと仕事を続けたい。
⑩	タイプB	8	12	高得点群	同僚・上司・後輩に恵まれ管理職にもなったが、以前から目指していることをやるために大きくふみだした。しかし諸事情で戻ることになる。現在の仕事はやりたい仕事と少し違うが、自分の好きなようにできることは楽しい。でもまたやりたいことに向けて勉強しようと思っている。

て生き方に関する考え方が変化したことが述べられている。この3名は2時期とも高得点というわけではないが、やりがいのある仕事に出会い、仕事を通して人間的に成長しているといえる。

タイプに関しては、タイプAは高得点群だけで

なく他の群の者も見られたが、タイプBは全員が高得点群であり、「仕事が充実し満足している」とする者より「充実感がないわけではないが、現状を色々変えたり模索してきた」者の方が青年期・成人期ともIWM得点が高い場合が多いと言える。

表5 否定的取り組み群の取り組みのタイプ, 2時期のIWM得点, 変化のパターン及び面接での仕事に関する語りの概要

Case 番号	取り組みの タイプ	1994	2011	変化の パターン	仕事に関する語りの概要
⑪	タイプC	-23	-20	低得点群	仕事はきちんとやっているが達成感もやりがいもない。やめる理由がないからやっているにすぎない。そういう気持でやってはいけない仕事だと思う。人の上にたつのが苦手だが、そのような立場にあり苦痛である。(何が向いているのか)一人でやる職人みたいな仕事に向いているのかもしれないが、かといってやろうとは思わない。看護師を続けるつもりはないが、やめて次のことを考えたくない。
⑫	タイプC	-22	-3	上昇群	それなりに仕事はしっかりやっていると思うが、部下の指導等に苦手意識がある。患者さんとのコミュニケーションは楽しいが、得意なわけではない。楽しいと思う時もあるけれど、本当は職人的な一人でやる仕事がしたい。
⑬	タイプD	-13	-22	下降群	仕事は楽な気持でできるし辛いことはないが、定年までやるかと言われれば微妙である。休みもとれるし、子どもにお金がかかるので続けているが、これから責任も出てくるし50才すぎてやっているイメージはない。(両立できているか)家庭を重視している。そんなに仕事に比重はない。
⑭	タイプD	-7	-9	低得点群	たまに辞めたいと思う。このままずっと定年まで看護師なのか、違うことをしてまた戻るといようにしたい。年をとって夜勤はきつい。でも結局いい職はない。4月から部署が変わり、覚えることがいっぱい大変である。
⑮	タイプE	0	0	その他群	看護職で頑張っている友人を見ると、虚しい気分になる。私も看護師であれば誰かの役にたっていたらのに、なんでこんなところで夫の仕事の下働きをしているのだろうと思う。でも結婚を後悔したら子どもに会えなくなるので、後悔しないようにしている。
⑯	タイプE	-7	-10	低得点群	段々力がついてきて企画を通すこともできるようになってきた。しかし経営会議等、本来の仕事以外がとても大変で充実感をもてない。上層部のやり方に問題を感じているが、それを動かす力もない。よい方向ではないと危惧している。
⑰	タイプF	12	11	高得点群	部下の指導等責任が大きい仕事もうまくいかず、しんどくて退職した。自分だけ逃げたと感じて自分を責め、つらい思いをした。今の仕事はやりがいがないというわけではないが、長いスパンで得られる達成感はない。以前の仕事はやはり魅力的だが、戻る自信はない。
⑱	タイプF	15	20	高得点群	出産後しばらく働いたが通勤が大変で専業主婦になった。その後派遣でのバイトやパートを少ししている。現在は子どもが生活の中心で、小学校にあがるまでは一緒にいたい。看護職として中途半端で、自信がもてないままきている。
⑲	タイプF	20	3	下降群	仕事を始めて1年で、今の医療についていけず、スムーズにいかない。仕事だけでなく、課題や研究もあり、ついていけるのか不安を感じている。でもまわりは応援してくれるし、段々増やしていきたいと思っている。家庭を重視しているが、看護の知識や技術を深めたいし、家計の助けにして子ども達に色々なことをやらせてあげたいと思う。

以上のように、肯定的取り組み群は、青年期-成人期共 IWM が高かった者と、両時期共に IWM が高いというわけではないが、やりがいのある仕事に出会って人間的に成長した者といえる。

(5) 否定的取り組み群の特徴

否定的取り組み群に分類された各事例の、2 時期の IWM 得点、変化のパターンと面接での仕事に関する語りの概要を表 5 に示した。

否定的取り組み群は、青年期に IWM 得点が低かった者が多い(最も低かった者から 5 名が該当している)。その内 4 名(⑪, ⑬, ⑭, ⑯)は低得点群で現在も得点は低く、一方⑮は大きく得点を上昇させている。この 5 名は全員仕事を継続してきており、キャリアを積んできているが、⑪⑫はタイプ C(仕事が自分に合わない)、⑬⑭はタイプ D(続けてはいるが、充実感はない)、⑯はタイプ E(現在の仕事に問題を感じている)であり、タイプ F(自信がない)はみられない。タイプ C(仕事が自分に合わない)は 2 名共「職人的な一人でやる仕事がしたい」「部下の指導というような人の上立つことが苦手」と述べており、対人的なことが苦手な IWM 得点が低いことと整合的な語りといえる(但し⑮は現在は IWM 得点が上昇している)。

一方否定的取り組み群の上記以外の者は、3 名は青年期の IWM 得点が高く、その内の 2 名は高得点群(⑰⑱)、1 名は下降群(⑲)であり、他の 1 名はその他群(⑳)で 2 時期での得点変化がない者であった。青年期の IWM 得点が高かった 3 名は全員タイプ F の「仕事に自信がもてない」者であった。⑰は職場での経験がトラウマになり正規で働かずにいるが、「以前の仕事はやはり魅力的…、でも戻りたいとはいえない」と述べている。⑱は専業主婦になり、その後派遣でアルバイトをしたりしているが、仕事を辞める前からしっかり仕事できていないように感じて「自信がなかった」としている。⑲は子育て上の問題で専業主婦生活を送り、最近になって働きだしたこともあり、まだ仕事に自信がもてないことが述べられている。否定的取り組み群に

関しては、「仕事が自分に合わない」「仕事にやりがいを感じられない」というタイプ C, D, E と、「現在仕事に自信を持ってない」タイプ F では様相が異なり、前者は青年期(あるいは成人期も)の IWM が低い一方、後者は IWM 得点が高い場合が多いことが示された。

5. 考 察

本研究では、成人期の仕事への取り組み方に関して、現在の IWM だけでなく、17 年前の看護学生だった青年期の IWM との関連も視野に入れて、prospective な手法でそれらの関連を検討した。2 時期の IWM については質問紙、現在の仕事への取り組みについては面接調査のデータに基づいて、先行研究である山岸(2013¹⁹⁾)よりデータ数が約 2 倍ある別のコホートで、より詳しい分析を行った。青年期・成人期の IWM 得点から、高得点群/上昇群/下降群/低得点群/その他群の 5 群に分け、仕事への取り組み方に関しては肯定的取り組み群/否定的取り組み群の 2 群、更に各 2 タイプ/4 タイプに分けて、その関連を検討した。

その結果、肯定的取り組み群の方が青年期・現在とも IWM 得点が高く、高得点の群 9 名の内 7 名が肯定的取り組み群であるのに対し、低得点群は 4 名全員が否定的取り組み群であることが示された。山岸(2014)²⁰⁾では質問紙で測定された成人期の適応(時間的展望(白井 1994)¹³⁾、レジリエンス(山岸他 2010)¹⁷⁾、生活満足度)に成人期の IWM 得点だけでなく青年期のあり方も関与している事が示されたが、成人期の仕事への取り組み方にも、現在だけでなく青年期の対人的枠組みも影響することが示された。IWM 得点が高い者は同僚だけではなく患者ともよい関係を作りやすく、仕事に適応し、やりがいや充実感を感じる人が多い一方、IWM 得点が低く対人的に不安をもったり回避的な者は、対人的な接触が多い看護職への取り組み方が否定的になりやすいと考えられる。

肯定的取り組み群の中では、「仕事が充実し満足している」(タイプ A)とする者より「充実感がな

いわけではないが、現状を色々変えたり模索してきた」(タイプB)者の方が青年期・成人期ともIWM得点が高い場合が多い傾向が見られた。IWM得点が高い者の中には、仕事にやりがいや充実感を感じるだけでなく、更によりよいものを求めて色々なことにチャレンジしようとする者がいるといえよう。

肯定的取り組み群の中にはIWM得点が高くない者も見られたが、それらの者はいずれも本人にとってよい仕事に出会い、仕事を通して人間的に成長していることが語られていた(②⑤⑥)。②はIWMを大きく下降させているが、仕事に熱中して看護への取り組みが深まる一方、仕事に没入するあまり「友人や楽しみはないがしろにしてきた」ことが関係していると推察される。

否定的取り組み群は、青年期のIWM得点が低かった者が目立った。対人的に不安をもちやすかったり回避的な者は対人的な接触が多い看護職には向かない可能性があるが、タイプC、Dの者は「仕事が自分に合わない」と思いながら仕事を続け、あるいは「続けてはいるが、充実感はない」と語っている。「職人的な一人でやる仕事がしたい」「部下の指導というような人の上に立つことが苦手」といって仕事を続けるのはつらいのかもしれないが、それでも仕事はきちんと有能にこなしており、⑩は長く看護の仕事をしている内に患者と良い関係をもつことで自他の枠組みが変化したのか、IWM得点を大きく上昇させている(本稿では触れないが、この上昇は母親との関係が大きく変わったことも関係していると思われる)。タイプDはCのように「仕事が自分に合わない」と明確に述べることはないが、看護の仕事から充実感を得られないのは仕事が自分に合わない可能性があるが、タイプEは「仕事が自分に合わない」というより、現状では自分に合った仕事ができずやりがいが感じられないという者である。⑯は本来の看護職の時は充実していたが、現在の仕事には問題を感じていること、⑮は夫の仕事の下働きでやりがいが感じられないということが語られた。この2名はIWM得点は高くないが、現在の状

況が否定的取り組みをもたらしており、本来の看護職に就ければ肯定的になる可能性が考えられる。

タイプFの「仕事に自信がもてない」者は3名共青年期のIWM得点が高かった。3名は全員非正規雇用であり、⑰は職場での経験がトラウマになり正規雇用を避け、⑱⑲は専業主婦になり、その後非正規で看護職に就いている者である。⑱は出産で仕事を辞める前からしっかり仕事できていないように感じていて「自信がなかった」としているし、⑲は子育て上の問題で専業主婦生活を続け、最近になって働きだしたが、ブランクのためにまだ仕事に自信がもてないことが述べられている。この3名が否定的取り組み群とされたのは、タイプCやDのような「仕事が自分に合わない」ということではなく、「現在仕事に自信を持ってない」ことから充実感や満足感がもてないのであり、自信を失わせることがあったり、仕事を中断したというような外的な理由によるといえる。彼女たちはキャリアを積み仕事に習熟してくれば肯定的取り組み群になると考えられる。事実この群はIWM得点も高得点群2名、もう1名も青年期は最高得点であり(⑲が成人期に大きく下降しているのは、子育て上の問題や苦勞が関与していると思われる)、IWM得点に関しては肯定的取り組み群と似ており、状況が少し変わることによって肯定的取り組み群に変わる可能性が考えられる。

6. 結 論

本研究では、まだほとんどなされていない青年期から成人期にかけてのprospectiveな検討を看護短大生を対象に行った。1994年と2011年の2時期のIWM得点から、高得点群/上昇群/下降群/低得点群/その他群の5群に分け、仕事への取り組み方に関しては肯定的取り組み群/否定的取り組み群の2群、更に各2タイプ/4タイプに分けて、その関連を検討した。主な結果は次の通りであった。1) 肯定的取り組み群の方が青年期・現在ともIWM得点が有意に高く、高得点群が多く否定的取り組み群は低得点群が多い。2) 肯定的取り組み群は高得点群の者が多く、またやりがいのある仕事に出会って人

間的に成長した者もみられる。3) 否定的取り組み群には、「仕事が自分に合わない」ために否定的な者と「仕事に自信を持ってない」タイプがあり、前者は青年期(あるいは成人期も)のIWMが低い一方、後者はIWM得点が高い場合が多い。成人期の仕事への取り組み方に対して、現在のIWMだけでなく青年期のIWMも影響しており、また成人期の状況要因—やりがいのある仕事に出会えるか、あるいは本人の仕事への熟練度—も関与していることが示された。

なお本研究の対象者は全員が看護職の経験がある者であり、母集団に偏りがあるが、青年期から成人期の職業経験に一定程度の共通性があることは、異なったタイプを分析する上では適切だったと考える。但し他の職業についても検討することが望まれる。

今後は、発達的な変化や状況の変化によって更にどうなっていくのか、縦断的な検討を続けていくことが望まれる。また今回は1994年と2011年の2時期に分析を限ったが、1994-1996-2001-2005-2011年の5回の調査全てに参加してきた者8名や4回の調査への参加者7名を対象に、どのような出来事が後のことにどう影響しているのかを、仕事以外の他者との関係等も視野に入れてより詳細に検討していくことも、生涯発達心理学の重要な課題と考える。

〈注〉

本研究は平成22年度～25年度日本学術振興会科学研究費基盤研究(C)(代表研究者 山岸明子)を受けた。本研究の一部はThe 16th European Conference on Developmental Psychology (Lausanne, 2013)で発表し、そのProceedingsの一部を修正し、大幅に加筆したものである。

評定を手伝っていただいた東京家政大学人文学部井森澄江教授に感謝します。

また長期間にわたって調査にご協力いただき、研究誌にその結果を公刊することを了承して下さった被調査者の皆様に心よりお礼申し上げます。

文 献

- 1) 荒木彩花・永井 綾 (2014) 看護師の職務満足度に関する文献検討. 看護展望, 39-4, 406-415.
- 2) Bowlby, J. (1973/1976) 母子関係の理論Ⅱ. 分離不安. 黒田実郎・岡田洋子・吉田恒子訳, 東京: 岩崎学術出版社, Attachment and loss. Vol. 2 Separation. Basic Books: New York.
- 3) Erikson, E. H. (1964) Insight and responsibility. Norton. 鎌幹八郎訳 (1971) 洞察と責任. 誠信書房.
- 4) Gilligan, C. (1982) In a different voice: Psychological theory and women's development Harvard Univ. Press: Cambridge. 岩男寿美子監訳 (1986), もうひとつの声—男女の道徳観のちがいと女性のアイデンティティ. 川島書店.
- 5) Grossmann, K. E., Grossmann, K., & Waters, E. (2005) Attachment from infancy to adulthood: Major longitudinal studies. The Guilford Press: New York.
- 6) Havighurst, R. J. (1972) Developmental tasks and education. Longman: London. 児玉憲典他訳 (1997), ハヴィガーストの発達課題と教育—生涯発達と人間形成. 川島書店.
- 7) Hazan, C. & Shaver, P. (1987) Romantic love conceptualized as an attachment process. Journal of Personality & Social Psychology, 52, 511-524.
- 8) Hazan, C., & Shaver, P. (1990). Love and work: An attachment theoretical perspective. Journal of Personality and Social Psychology, 59, 270-280.
- 9) 平田明美・勝山貴美子 (2012) 日本の病院看護師を対象とした職務満足度研究に関する文献検討. 横浜看護学雑誌, 5-1, 15-22.
- 10) 三輪聖恵・志自岐康子・習円明裕 (2010) 新卒看護師の職場適応に関連する要因に関する研究 日本保健科学学会誌, 12-4, 211-220.
- 11) 諸上詩帆 (2012) 従業員のパーソナリティ傾向を中心とした個人特性が内発的・外発的職務満足に与える影響の検討 横浜商大論集, 46-1, 83-109.
- 12) 島津美由紀 (2004) 職務満足感と心理的ストレス. 風間書房.
- 13) 白井利明 (1997) 時間的展望体験尺度の作成に関する研究. 心理学研究, 65-1, 54-60.
- 14) 高橋浩司 (1999) 態度の測定(1): 職務満足. 渡邊直登・野口裕之 組織心理測定論. 白桃書房. 107-130.
- 15) 詫摩武俊・戸田弘二 (1988) 愛着理論からみた青年の対人態度: 成人版愛着スタイル尺度作成の試み. 東

京都立大学人文学報, 196, 1-16.

- 16) Vaillant, G. E. (2002/2008) *Aging well: Suprising guideposts to a happier life from landmark Harvard study of adult development*. Little Brown & Company: New York. 50歳までに「生き生きとした老い」を準備する. 米田 隆訳, ファーストプレス.
- 17) 山岸明子・寺岡三左子・吉武幸恵 (2010) 看護援助実習の受け止め方とレジリエンス（精神的回復力）及び自尊心との関連 医療看護研究, 6, 1-10.
- 18) 山岸明子 (2012) 青年期から成人期の対人的枠組みと対人的認知—19年後の縦断的变化— 順天堂スポーツ健康科学研究, 3-4, 209-218.
- 19) 山岸明子 (2013) 青年期に記述された生育史の良好さと成人期の適応との関連—内的作業モデルを手がかりにして— 青年心理学研究, 25, 29-43.
- 20) 山岸明子 (2014) 成人期の適応に影響する青年期・成人期の対人的要因—17年後の縦断的データに基づく検討— 順天堂スポーツ健康科学研究, 5-2, 29-38.
- 21) Werner, E. E., & Smith, R. S. (2001) *Journeys from childhood to midlife: Risk, resilience, and recovery*. Cornell Univ. Press: New York.

（平成27年4月21日 受付）
（平成27年8月6日 受理）